

人間の宗教としての法然教に對する一考察

今 井 玄 明

一、序 論（研究の意義並に題意）

二、宗教と民族精神

三、宗教の本質及宗教の定義

四、宗教の本質的地位としての法然教

五、三國佛教の特色と法然教の特色

六、日本佛教の精華としての法然教

七、法然教の本質

1 教理的立場——（助け給への一心）

2 心理的立場——（二種深信の信相）

八、結 論

一、序論（研究の意義並に題意）

夫れ故人言へるあり、「吉水の清き流を汲める者、宗祖の教範を知らずして、徒に餘宗の教義を研究せば、終には其の流を汚すのみならず、臆ては反りて自宗を忘却するに至らん哉」と、眞に之至言ならず哉。然れども、自宗の其の特質とする處のものを探求し、而して此れを顯彰するは此れ豈無意義なるべけん哉、吾人は此處に於て、偉大なる人

格者たる法然上人、時代を洞察し、萬人を救済し、時代を救済したる我が宗祖法然上人の御高德を追慕し、敬仰の情止まざるものあり。依りて此處に宗祖法然上人の偉大なる御人格を追想し、特に法然上人の教を法然教と此處に名付け、而して此の宗教が特に人間の宗教として其の最高至上のものたることを宣揚し、以て宗祖上人に報ひ奉らんと欲するなり。蓋し夫れ此の一細事をして、いさゝかなりとも宗義を顯彰し、而して宗祖に報ひ奉る所以のものとなるなれば、以て私の幸祉とする處なり。

二、宗教と民族精神

凡そ如何なる國、如何なる民族と雖も、宗教を眞に有せざるものあらざらん哉。宗教が如何に吾人人類の必然的要求を満足せしむる所以のものであり、如何に吾人人間生活と密接不可分なるものなるかは、今更吾人の諫々するを要せざるべし、又其の宗教が、如何に必然的に其れを信奉する民族の、其の民族精神に所以せるかは、世界人類歴史に徴する處明かなるべし。さればあらゆる宗教は、其れを信奉する民族の民族精神に所以せるは、自明の原理と言ふべし。されば如何に文化の進歩發展せし國家或は民族に於ても、或は又如何に文化の幼稚なる民族に於ても、吾人は其處に各民族は其の民族の民族性の必然的要求として、其の民族に適合せる宗教を維持し來れるを認むべく、而も各民族の其の民族性或は其の民族生活に、よりよく適合せる宗教ほど、即ち一民族の民族性と全く融和合一し、其の民族の日常生活に即せしもの程、換言せば、民族性即宗教性、宗教性即民族性なるもの、或は日常生活即宗教、宗教即日常生活なるもの程、其れを信奉せる民族の宗教は、摯烈であり、強堅であり、絶對である。實際宗教が其れを信奉する民族の民族性に所以し、其處に密接不可分なるものあるは、何人も否定し得ざる處なるべし、今此れを三國傳來の佛教に就

て見るに、吾人は其處に明らかに此の事あるを肯定し、而して興味を持する者である。即ち印度民族の信奉する印度佛教は明らかに印度の性格を有し、支那民族の信奉する佛教は明らかに支那の性格を有し、日本民族の信奉する佛教は明らかに日本の性格を有すべし。蓋し三國佛教の性格に就ては後述するであらう。唯だ吾人が此處に注目すべきは、佛陀所説の佛教が、時間的差異あるにせよ、三國に流通し、根本的に一なるものが、所を異にして、三様の性格を構成せしことであり、而も此の三様の性格を有する佛教も、其の本質的には根本的に一なるものあるを認むべく、而して此の三様の性格の佛教は、そは必然的にその發達過程を示すものであると共に、其の性格の如何に依り、或は其の宗教性乏しきに依り枯死して滅亡の域に達せしもの、或は其の民族性の特殊的要求の必然的結果として、全く國民生活より遊離し、特殊的消極的且隱遁的にして、衰滅の一路を岐らんとせるもの、或は此れと反對に、經論渡來の其のかみより今現に至るまで、常に國民生活の指導理念となり、國民生活の原動力となり、大衆的國民的にして、而も日常生活即宗教なるものとなり、實に生活と宗教とが相對的に存在すべきものにあらず。又生活の一部分が宗教なるものにもあらずして、宗教の中に吾人の生活の凡てが存すべきであり、吾人の生活の凡ては宗教に基礎付けられ、宗教に依て意義付けられねばならぬものであり、かくして益々佛陀の眞生命を發揮しつつあるものであるといふことである。かくして吾人は此處に實に宗教の宗教たる所以のものあるを認め、宗教の宗教たる本質的なものを概念的にも把握し得るのである。

三、宗教の本質及宗教の定義

蓋し今、宗教の本質如何に就て思考するに、シュライエルマツヘルに依ると、「宗教の本質は斷じて吾人の認識に訴

ふべきものにあらずして、偏に吾人が絶對的に神に憑依する感情に基くものである」と言ひ、ロバートソン・スミスや、ジエブンスに依ると、「民族的なる社會の連帶が、宗教の基礎觀念であつて、其の象徴である神を中心として同族又は信者の精神的集團をなしたるものが宗教なり」と見てゐる。殊にデュルケムは、「民族的集團の精神的方面、若しくは特殊的敎團としての敎會を宗教の本質的な要素であるとなし、信念や行事の體系も、其れが敎會として統一されなければ宗教をなさず」と論ぜり。（宇野圓空博士著・宗教學四十四頁參照）

吾人今此れを案するに、宗教の本質なるものは、其れは單なる經驗事實なるものにもあらず、又諸種の經驗事實から歸納される共通要素なるものにもあらずして、反て其の經驗的事實に時間的にあらずして、論理的に先立つものなりといふべし。而して其れは又宗教の事實を遊離して存在せるものにもあらず、又宗教の事實其のものにもあらずして、實に事實と異なるより高次なるもの即ち宗教の經驗事實をして事實たらしめて居る普遍妥當の且先天的超時間的なものであるべきなり。

されば宗教の本質なるものは、事實其のものから引出されるものにあらずして、事實に意味を與へる先驗的な根據なりと言ふべし。されば今宗教の本質を定義せば、「宗教は、人間の力以上の力（一神敎）或は、諸力（多神敎）を認め、此の力に絶對的に憑依歸向する感情及其の力と吾人との間に相互的關係が存するといふことである。」

四、宗教の本質的地位としての法然敎

今此の宗教の本質より見るに、吾人の信奉する淨土敎こそ、就中人間の宗教としての法然敎こそ其の尤も宗教の本質的なものに即應すべきものなるべし。實に法然敎こそ、宗教の中の純宗教であり、絶對的憑依歸向する感情に全

く立脚し、而も其處より出發せるものにして、此處に實に人間的なものが存するのである。即ち人間の宗教としての或は、慈悲の宗教としての宗教なりと言ふべし。換言せば人間性に立脚せる溫味ある情的宗教であり、生命ある宗教、生きる宗教、生活せしむる宗教であり、吾人をして常に立ち上らしむる宗教であり、吾人の生活の根源となり、今日一日を感謝の中に送り、明日一日の無事ならんことを祈り行く眞の生活の宗教である。

實に此の法然教こそ國民生活の指導原理となり、國民精神作興の指導理念を基礎付ける宗教である。

扱て今此處に三國佛教の性格を對比し、此の宗教の中の宗教たる、即ち國民生活の指導原理としての宗教であり、國民精神作興の指導理念を基礎付ける宗教である我が法然教の法然教たる所以並其の純日本の性格に就いて概論せん。

五、三國佛教の特色と法然教の特色

凡そ一國の宗教を知らんと欲せば、其の國の宗教文化を知るべし。而も此の宗教文化が其の宗教を信奉する民族精神に所以し、各民族精神は又各民族の居住する世界の氣候風土風俗習慣に所以することは今更言を俟たざるべし。今三國佛教の性格を論ぜんとするに當り、其の氣候風土風俗習慣に所以することは此れを論ずるを止め、今主として、其の民族精神に立脚し而して此れを論ずるであらう。

(1) 印度佛教の印度的性格

印度の佛教は明らかに印度的性格を持すべし。そは蓋し宗教的思辨の性格を持ち、哲學的厭世主義的性格あるを特色とするであらう。即ち厭離穢土欣求淨土の所謂厭世主義的傾向濃厚なり。此れ觀經所説の韋提希夫人の釋尊に對する態度に於ても明らかなるべく、定善十三觀實に之此れを實證せん哉。龍樹の淨土教に於ても亦然り、即ち彼の十

住毘婆沙論の思想的背景をなすものは實に大品般若經の空緣起思想と華嚴の重々無盡緣起哲學とが、其の根底をなすものである。無着の淨土教亦然り。即ち彼の十八圓淨は龍樹の十住毘婆沙論の思想の展開せるもので、無盡緣起如來藏緣起を其の背景とせるものである。而して此の無着の十八圓淨を更に展開せるものが天親の往生論に説く二十九種莊嚴である。蓋し斯くの如く緣起の理法を認識する仕方を説くを其の中心とするが故に必然的にそれは認識論的即哲學的思辨的佛教にして超人間的宗教なりと言ふべし。

(2) 支那佛教の支那的性格

支那の佛教は明らかに支那の性格を持すべし。それは蓋し形式主義的にして道德的なるを以て其の特色とするであらう。即ち曇鸞大師以前は龍樹教學の思想的影響を受け哲學的思辨的方法に依りて淨土教義を演繹せる處に其の特色があり、曇鸞大師以後に於ては概して形式主義的にして道德的色彩濃厚なるを認め得べし。即數量念佛思想流行し、(曇鸞大師の小豆念佛等)淨土變相模寫の流行(善導大師の淨土變相三百鋪等)せることなり。此處に吾人の注目すべきは、儀式儀禮を中心とせる懺悔念佛の流行である。此れ實に其の時代性が斯く然らしめたるものと考へ得べくも、吾人は此處に其の民族性の依りて然らしめしもの大なるものあるを痛感するのである。即ち此の時代の宗教は、形式主義的宗教即道德主義的宗教であり、道德主義的宗教即形式主義的宗教なりと言ふべし。されば極端なる日常生活の嚴肅化こそ眞の佛教なりと考へ、終には極端なる戒律主義者の出現迄に至れり。(道元律師の如し)斯くの如く日常生活の嚴肅化(而も此の嚴肅化とは道德的意義を多分に含有する)の觀念より朝題目の夕念佛式而も數量的なる形式主義的佛教となれるなり。勿論かゝる傾向の佛教は隋末唐宋時代に至り極めて盛であり、而も現代に至るも尙其の性格あり、故

に純一性ある佛教にあらずして、多様性雑多性なる厭離穢土欣求淨土の厭世主義的性格に、多分の道德的色彩を混合せる佛教なりといふべし。

(3) 日本佛教の日本の性格

日本佛教は明らかに日本の性格を持すべし。蓋し日本の佛教に關する限り、就中日本淨土教に關する限りそれは日本の佛教なるものにあらずして、寧ろ日本の佛教なりと言ふべし。されば日本の性格を持するものにあらずして日本の性格を、宗教的に如實に表現せるものと言ふべし。換言せば、日本佛教は、印度佛教或は支那佛教の單に模倣的な日本の展開にあらずして、實に日本民族の民族性或は日本精神の宗教的に表現されたるもの其のものが、日本佛教の全體なりと言ひ得べし。實に日本佛教は外部より内部に入り來りしものにあらずして、内部より外部に瀑生せしものである。即自己に内藏せしものが、其の必然的結果として、佛典佛像の傳來を一契機として、外に宗教的瀑生せしものと思ふべきが、蓋し夫れ日本佛教に關する限り至當なる見方なるべし。

六 日本佛教の精華としての法然教

扱て日本佛教の日本の性格に就て更に一言せん。惟神の大道である日本精神は即日本佛教の全體である。就中日本淨土教殊に我が法然教こそ其の眞髓たり。

されば我が淨土教は何處迄も現實主義的であらねばならぬ。單なる未來教であつてはならぬ。其は彼の印度の如き超個人的なるものにあらず、又支那の如き極端なる形式主義的なものであつてはならぬ。何處迄も現實に強く立脚し、而も極めて人間的なるものであらねばならぬ。然らば此の極めて人間的なるものは即何であるか、それは即人間の

宗教たるべし。換言せばそれは即眞に生き行く宗教であり、眞に生活する宗教であり、人間性に立脚せる溫味ある情的宗教であり、慈悲の宗教たるべきなり。實に我が法然教こそ煩惱具足的人間の性格を持すべし、而も日本民族の其の島國の性格よりして必然的に現實主義的且簡潔性を尊重し易行易修の宗教が要求され、還愚の宗教なる極めて純宗教的且實踐的な人間の宗教が一般民衆の佛教として發展して行つたのである。此處に日本佛教の精華としての法然教の意義存すと言ふべし。

七、法然教の本質

(1) 教理的立場

法然教の本質は即我が淨土宗義の本質である。それは即我が淨土宗の信仰生活の指導原理であり、絶對的不可還元の理法であり、淨土宗の信仰事象の綜合統一的理念である。而して其の立場は絶對矛盾的自己同一的立場に立脚すべきである。即單なる聖道門及淨土門の對立的なるものではなく、聖淨を綜合統一した絶對高次の淨土門たるべきなり。

法然教の本質は勿論選擇本願念佛に立脚する事は今更論する迄もなく明白なるべし。然して此れ即正定業の念佛にして、法然上人立教開宗の文として人口に膾炙されし處所謂、一心專念彌陀名號行往坐臥不問時節久近念々不捨者是命正定之業順彼佛願故之なり。而して此の順彼佛願故の五字に重要な意義存すべし。宗祖は一枚起請文の中に「唯往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して疑ひなく、往生するぞと思ひ取りて申す外には別の些細候はず、但三心四修と申すことの候は皆結定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ中にこもり候也」とあり。又御法語に、「源空が目に

は三心も四修も皆南無阿彌陀佛に見ゆ」とあり、鎮西上人は末代念佛授手印の奥圖の傳に、安心起行作業皆悉く南無阿彌陀佛に結歸することを説かれ結歸一行三昧を主張されて居る。而して正定業の念佛は又第十八願の念佛である。即至心信樂欲生我國である。而して此等三つは個別的に動かずして一つになりて動くものなり。第十八願の念佛は即觀經の所謂三心具足の念佛にして、而も其れは深信の一句に依りて統一さるべし。即助け給へ南無阿彌陀佛の一念であり、唯往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の些細候はず（一枚起請文）である。偏に本願を信するのである。本願とは即如來の大慈（心）のあらはれである。而も此の慈悲たるや大智に裏付けられたる慈悲たるべし。本願を信することは、如來の心を信することであり、小さき我が大いなる如來の御心の中に生かされて居ることを知ることなり。

扱て此處に注目すべきは、法然教の所謂信は單なる信なるにあらず、實に信行一如の念佛たるべきことなり。又其の行たるや行の爲の信なるにあらず、實に信の爲の行たるべし、而も此の信行は個別的に動くものにあらずして、信行具足綜合統一された立場に於て初て具體的實在するものであるといふことなり。

(2) 心理的立場

法然教義の本質が深信の一句に盡きることとは既に述べたり。即三心は助け給への一心即願求往生心に歸一するものなるが、其の願心の心理的内容は、機法二種深信の信相たり。機の深信と法の深信とは互に矛盾背反せる信相にして、前者は徹底的自力の否定即相すまんの氣持、浮ぶ瀬無き我なることを信じ、懺悔を其の主體となし、後者は全面的他力の肯定即有難いといふ氣持、愚痴の我なるにもかゝらず尙浮ぶ瀬ある我なることを信じ、感謝を其の主體となす

なり。此の懺悔の信相と感謝の信相の二つが止揚され、綜合統一される所に眞の救済があり、本願の不思議が存するなり。而も機の深信の徹底が必然的に法の深信を進化させ法の深信の徹底が其のまゝ機の深信を進化せしむるなり。即自力(機)を否定すればする程他力(法)に没入し、他力(法)を肯定すればする程自力(機)を否定せざるべからず。されば法然教義の特色は、念々稱名常懺悔なるべし。即懺悔を主體となし、其の中に感謝を包擁し、互に媒介止揚された立場即懺悔即感謝であり、此れが宗義上からは助け給への一心なり。機即法、法即機であり、信即行、行即信、此れが南無阿彌陀佛の全體であり、而も此の南無阿彌陀佛の結歸一行三昧こそ、法然教義の全體であり、吾人の安心起行作業の總てが、否吾々の日常生活の總てが、皆南無阿彌陀佛にこもり候なりと信じ、口に南無阿彌陀佛を行ひ念々稱名常懺悔の生活をなし行く處に自らして吾人は暗黒の世界より光明の世界へと救はれて行くものなり。此の念々稱名常懺悔の生活は實に機法二種深信の信相を離れて存在せるものにあらずして、此處に法然教の本質の心理的根本基調存すと言ふべく、實に念々稱名常懺悔の宗教こそ、眞に人間の宗教としての宗教なりと言ふべし。

八、結 論

要するに人間の宗教としての我が念佛こそ實に皇道精神の羽翼であり、精神日本の推進力たるべし。念佛行者の心掛は、平時にありては、一切の同行人と共に日進日新の生活を営み、敬神崇佛の心を養ひ、常に緩急に處するの覺悟を練り、死しては彌陀の淨土に生れ、再びこの世に還り來つて無私奉公を期せんとするにあり。此れ我が法然教の念佛精神なるべし。時局益々多事多端、我等吉水の流を汲める者、宜しく單刀直入我が選擇の御旗がざして、七百年來受繼ぐわが念佛精神を以て、一億國民の精神を作興し以て宗教奉國爲し得べくんば、以て宗祖に報じ奉るべく、愚才

の一研究の細事をして、いささかなりとも其れに寄與する處あれば、以て吾人の幸祉とする處なり。

參考書類

- | | |
|--------------|----------------------|
| 1、宇野 圓空博士著 | 宗 教 學 |
| 2、鶴 藤 幾 太 氏著 | 宗教學概論 |
| 3、野々村直太郎氏著 | 宗教學要論 |
| 4、惠谷 隆戒先生著 | 淨土教の日本的性格(佛專學報第二十二號) |
| 5、惠谷隆戒先生講述 | 宗 學 要 論 |
| 6、藤浦 慧 嚴 氏著 | 支那に於ける天台教學と淨土教 |